

令和八年度

人文学部

学校推薦型選抜・帰国生徒選抜・社会人選抜

小論文

注意事項

- 一 開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
- 二 問題用紙は三枚、解答用紙は二枚、下書き用紙は二枚です。
- 三 問題用紙、解答用紙、下書き用紙に不備がある場合は、直ちにその旨を監督者に申し出てください。
- 四 すべての解答用紙の所定の欄に、受験番号を記入してください。
- 五 解答は、すべて解答用紙の所定の欄に記入してください。解答用紙の所定の欄以外に記入した解答は、評価（採点）の対象としません。
- 六 試験終了後、問題用紙と下書き用紙は持ち帰ってください。

以下の文章を読んで、問いに答えなさい。

近年、政治や社会について語る時に、よく使われるようになった言葉が「分断」だ。私たちの日常を覆う、この空気の正体は？ 東日本大震災からの復興を巡る議論に関わり続ける、社会学者の開沼博・東京大大学院情報学環准教授に聞いた。

—現代の社会を表す言葉として、最近、「分断」という言葉が、よく用いられます。

あたかも最近になって生じたような言説もありますが、様々な差別や厳しい格差といった「分断」自体は、昔から存在しました。

かつては、社会的に許容されなかった人々の多様性が、包摂されるようになってきていることを見れば、「分断は無くなってきた」とも言えます。

一方で、トランプ政権下の米国で進められたメキシコ国境での壁建設や、二〇二一年の米連邦議会議事堂襲撃事件に象徴されるように、従来とは異なるレベルで「分断を表面化する」ことへの歯止めが外れたようにも見えます。

—なぜ、そうした状況が生まれているのでしょうか。

一つは、「建前」と「本音」を私たちがどう扱うかという点の混乱があると思います。

閉じられた私的な場では本音を打ち明けても、不特定多数がいる公的な場では建前を言う。その使い分けが、本音をそのままさらしたら生まれうる葛藤を、抑止してきた側面がありました。

本音のレベルでは抵抗がある価値観やうまく付き合えない人に対しても、建前のレベルではわかり合えるように近づいていこうとする。そういうコミュニケーションも、ありうるわけですね。そこにおいて、建前は分断を埋める機能も持っていました。

ところが今は、それが倒錯した形で、私的な対面の場では建前で振る舞うのに、インターネット上の公的な場で本音を言い立てるような人もいます。従来の構造が無効化しています。

—その背景にあるのは。

情報技術の発展、メディア環境の変化とあいまって、本音を言い合える親密な人間関係やコミュニティから、排除された人が増え続けてきたことがあるでしょう。一方、ネット空間では、自分の意見を書き込めば、誰でも聞いてくれるかのような感覚を得られます。それ自体は悪いこととは言えません。しかし、そこにはもろもろの包摂を望む、メンタリティーも存在します。

とにかく注目を浴びていなければ、自分の存在が「ない」ことにされてしまう不安。「怒られる人ではなく、怒る人の側にいたい」。あるいは、多くの注目を集めている言葉を「いいね」や拡散するだけで、自分も大きな物語の一部になれたような気になり、安心できる……。

——不安が人を動かすわけですね。

「こうすれば安心」といった言葉より、不安をおおる言説のほうが人を刺激することは社会心理学的に指摘され続けてきたことです。

これは、東京電力福島第一原発事故による放射線の問題と向き合う中でも感じてきたのですが、不安を語り合うことが一つのコミュニティを形作ることがあります。非常時において、個人でいることに耐えられない人たちが、不安を共有し語り合うことで癒やされています。自分たちと異なる価値観を排除することによって、包摂されるコミュニティとも言えます。

——そうしたコミュニティは今、多いのでしょうか。

「不安」や「不満」を共有する人を集め、「共に戦おう」と呼びかける。これは近年、国会で議席を確保した、イデオロギー的には正反対に見える部分もある小政党に共通する構造です。

「世間の『建前』を崩し、『本音』を言ってくれる彼らこそ、私たちの味方。自分も参加したい」という人々の情緒を喚起し、力の源とする姿勢。そして「声を大にして『本音』を言うことを肯定すべきだ。『建前』に閉じこもらず、路上に出て行動することが社会を変える」という感覚。これらが合わさって、「熱狂と『分断の可視化』のフォーマット」が形作られています。

ただ、デモに代表されるような「路上の行動」は、今のところ結果に結びついていません。そのため、参加した人たちのメンタリティーは、より極端な状態に向かっているのではないかと危惧しています。

——他者を排除する今日の「分断」に、どうしたら橋をかけることができるのでしょうか。

一つは、継続性と直接性に支えられたコミュニティを回復していくことです。

どんな集団においても、価値観の異なる多様な人が出会えば、もめてもおかしくありません。でも、継続的に対面で会い、コミュニケーションをとる慣習を集団が身につける中で信頼が築かれ、誰かを傷つけたり、決定的にコミュニケーションが断絶したりしないように「角が取れて」きます。

もちろん、それだけでは十分ではありません。そのコミュニケーションの外には、自分が知らない世界があると認識する謙虚さ。そして、新しい視点を与えてくれるような知識を共有していくことも必要です。

二〇一六年、福島原子力災害とその被災地を巡る状況について、現地に生きてきた人たちと共に『福島第一原発廃炉図鑑』をまとめました。陰謀論のような言説も聞かれる中で、重要なものは「中」から見たら当然の世界観を、「外」からは全く認識できていない現実を、徹底的に描くことだと思っただけからです。

人間は、複雑さや多様性を感じると不安になります。でも、そこに向き合う思考回路を作らなくてはなりません。

——ただ、なかなか受け入れられない考え方もあります。

受け入れられなくても、それを「受け止める」ことはできるのではないのでしょうか。現代的な「分断」の根本には、「私の価値観を受け入れない他者を絶対に許さない」という意識があります。そもそも、全員が受け入れてくれる「正しい」価値観など存在しませんから、満たされようのない欲望です。でも、受け止めてくれる人はいるかもしれません。

そこで「受け止めてくれて良かった」と確認しさえすれば、社会は壊れずに前に進んで行ける。自分たちと同じように相手も多様であると考え、それを可視化していくことが大切だと思います。

福島県で住民参加のワークショップや対話イベントに関わる時、最初に、参加者全員に自分の意見をカードに書いて掲げてもらい、それを撮影することで、可視化します。その上で小さいグループに分かれて、過程を記録しながら議論をしていくと、極端に偏った話は、それほど出てきません。多くの人は、どうやったら前に進めるかを真剣に考えたいと思っていますし、対話したいと思っています。黙っている人にこそ「答え」があると思います。

(朝日新聞デジタル二〇二三年一月一三日「建前」が機能を失った現代 社会学者・開沼博さんが危惧すること」聞き手・増田愛子 一部改変)

問一 傍線部について、開沼博氏は具体的にどうすべきだと主張していますか。二〇〇字以内で説明しなさい。

問二 課題文をふまえて、「分断」についてあなた自身の考えを八〇〇字以内で述べなさい。







下書き用紙（解答用紙ではありません）

A large grid of graph paper with numerical labels at the bottom: 800, 700, 600, 500, 400, 300, 200, 100.